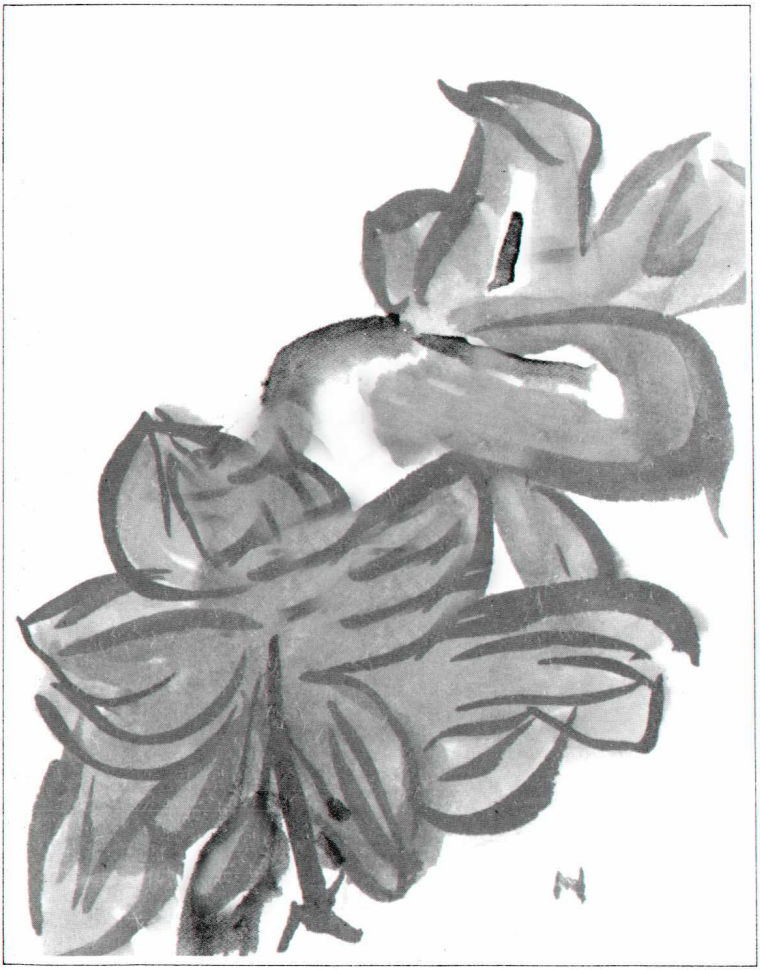
雨過天晴の巻

回想の文学 ⑤
昭和十七年—二十三年

中島健蔵

天晴の巻

回想の文学❺　昭和十七年―二十三年



中島健蔵

平凡社

中島健蔵（なかじまけんぞう）

1903年東京に生まれる。1928年東京帝国大学文学部仏文科卒業。同研究室副手を経て1934年講師となり，1962年にいたる。1933年ごろから評論の執筆をはじめ，「作品」，「文学界」の同人となる。戦後，文芸家協会，ペンクラブ等の再建に協力，各種の団体を創立，役員として働く。現在日本中国文化交流協会理事長のほか役員多数。
『昭和時代』（岩波新書）『自画像』1～5（未完・筑摩書房）『音楽とわたくし』（講談社）『後衛の思想』（朝日選書）ほか多くの著書がある。

雨過天晴の巻　回想の文学⑤
昭和十七年―二十三年
昭和五十二年十一月二十五日　初版第一刷発行
定価　一二〇〇円
著者――中島健蔵
発行者――下中邦彦
発行所――株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四番地一
郵便番号一〇二一　振替・東京八―二九六三九
電話（〇三）二六五―〇四五一（大代表）
印刷――図書印刷株式会社
製本――株式会社石津製本所

© 中島健蔵 1977　Printed in Japan
不良本お取替えは直接小社サービス課まで
（送料小社負担）

雨過天晴の巻　目次

一　訣別　9
国民の心情――「徴用」という名の強制雇傭
――母の歌――短かい縁
二　大阪集結　27
自己紹介と瀬踏み――東京からの手紙――
徴用か懲用か
三　南航記　46
老朽輸送船みどり丸――『飛魚の唄』――
サイゴン
四　井伏鱒二との再会　65
「赤道」を見た兵――戦地への上陸――再会
――最初の難題

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　露出する矛盾　84
人格劣化――華僑の母――生々しい戦場――リャオ群島――日本語運動
六　戦地と内地　104
「マル宣」の徽章――従軍画家――華僑との接近――山崎海軍大佐
七　台風の眼　123
平野直美の負傷――敵性放送傍受班――交換船の中立国新聞記者――月夜の錯覚
八　楽観主義の危機　142
七・七記念日の匿名社説――平野直美の死――「日本文化講演会」

九　あぶない橋　165
招魂祭――華僑の打ちあけ話――服装について――出張命令
一〇　マライ半島縦断記　180
州政庁と警備隊――イスラム教団――ジャングルの樹海
一一　内地への帰還　197
伏見丸乗船――ガダルカナルの悲劇――東方社――文壇の空気
一二　焦土への道　217
走る火の粉――母の疎開――自宅焼失

一三　戦争末期の錯乱　236
無条件降伏まで——島木健作のこと
一四　敗戦の表情　258
三木清の死——適格審査——ペンクラブ再建
一五　母の死　280
喜寿の祝——愛情の搾取——浄化
あとがき　300
昭和十七年——二十三年関係年表　306
索引　331

装幀　口絵　中川一政

雨過天晴の巻

回想の文学⑤
昭和十七年——二十三年

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

一　訣　別

国民の心情――「徴用」という名の強制雇傭――

母の歌――短かい縁

「天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ践メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス　朕茲ニ米国及英国ニ対シ戦ヲ宣ス……」

一九四一年（昭和十六年）十二月八日のこの「詔書」のラジオ放送による公表は、午前六時であったという。その前後のわたくしの日記は、この回想の前巻に写したが、別に残っているポケット用の手帖には、「バルザック」とあるだけで、開戦のことは書いてない。バルザックの『人間劇』の総序を訳す約束をしていたので、その日の予定として書きとめたのだが、前夜、白水社の会で酔ったので、仕事はできなかったと思う。疲れて、寝坊をしたため、朝六時の「詔書」の放送は聞いていない。

もちろん、宣戦布告以前、午前三時二十五分に、ハワイ真珠湾に対する攻撃がおこなわれ、「奇襲」という名の不意討ちがおこなわれたことの意味もよくわからなかった。日中戦争を「事変」といいくるめたやり方の延長線上にある日本近代史中の汚点の一つである。これらはいずれも、日本国民のほとんど全部の意志と無関係におこなわれた。

今度こそは「戦争」である。その時の国民の反応はどうであったか。確かに、何人かの国民が、その朝、皇居の二重橋前で土下座して感激をあらわしている写真が残っている。また、十二月十日には、東京の新聞、通信八社の共催で、「米英撃滅」という標語をかかげた「国民大会」が後楽園球場で開かれている。そして、あまり引き合いに出したくはないが、高村光太郎の詩『一二月八日』のような感激の吐露も事実であった。これらの事実は、故服部之総を中心に、「日本近代史研究会」という名の下に集まった歴史家たちの『写真図説・総合日本史・第八巻・近代篇下』（国際文化情報社・昭和三十一年刊）を開いて書いているのである。この本の編集執筆者の中には、色川大吉、遠山茂樹、宮川寅雄など、多かれ少なかれ、わたくしもつきあったことのある人々も加わっていた。通俗書だが、敗戦後、あまり時がたっていない時の編集だけに、わたくしにとっては、回想を引き出すための引きがねとして有効な本となっている。

その後、昭和史の刊行がさかんとなり、一九七六年（昭和五十一年）に、開戦当時の世相について執筆を求められた時、その副題として、「人々は歓喜の声で迎えたが……」とあらかじめ書いてあるのを読んで、ただちに、その編集者が、戦争を知らない世代の人であろうと感じたのであった。副題は与えられた条件だったので、やむをえず、わたくしは、次のように書きはじめた。

「人々は歓喜の声で迎えたが……」という副題は、太平洋戦争がはじまった時の世相にふさわしいであろうか。実は、「歓喜の声」などは、ほとんど聞こえなかったのである。「人々は」とはどういう人人のつもりか、少なくとも、わたくしの周辺、そして、当日、わたくしが歩いた東京の町々のどこにも、そんな声はなかった。日本国民が、米・英を向うにまわしての大戦争を、こぞって楽観的に歓迎したなどとは、調子に乗った報道にはそんな記事もあったかもしれないが、現実的にはありえないことであった……。

日本政府は、太平洋戦争を「大東亜戦争」と呼んでいたが、表と裏とのひどいちがいを、これほど露骨に感じさせたことはなかった。しかも、西欧の植民地主義を打破して、アジア諸国の向上と団結とを、ほん気で考えていた日本人がいたし、一方、新しい植民地主義的侵略をなかば公然と主張していた日本人がいたのである。そして、戦争に駆り出されて、理想もなければ大して欲もなく、ただ戦ったのが大部分の日本人であった。「一君万民」の「国体」が国是として存在する以上、宣戦の「詔書」の効力は、日本国民全体を拘束し、戦争協力とか非協力とかいう個人の自由意志は、原則的に表面には出ることがなく、戦争否定は、個人的信条としてはありえても、国全体が戦争肯定に染め上げられている中では、戦争阻止の力とはなりえなかった。戦争がいやなら、なぜ協力を断わらなかったのかというような反問が、戦後の世代の人の口から洩れるのを聞く時、そういう甘い考え方に、何度か嘆息することがあった。

開戦に際しての各人の反応は、まず、自分自身が軍籍にあるか否かによって異ならざるを得なかった。未教育補充兵であっても、軍籍のある男子は、召集を覚悟するほかなかった。召集令状は、赤い用紙を用いていたので、「アカガミ」と呼ばれ、出頭してはねられ、帰郷させられることは、自分の健康が危険な状態にあることを宣告されたのと同じことであった。枢要欠くべからざる職務についている人間に対して若干の考慮が払われなかったわけではない。軍の「報道部」などに配属され、一般の軍務につかずにすんだ作家もいた。そして、軍籍のない人間にしても、安全とはいえなかった。国民徴用令による徴用がそれであった。

すでに、開戦の前から、文学者を含む第一次の陸軍省徴用がおこなわれていた。「文芸年鑑・二千六百三年版」には、「記録・十七」として『軍報道部員として活躍せる作家氏名』という項がある。第一次の徴用も第二次の徴用も一しょに並べてあり、陸軍の方は、実際には「報道部員」ではなく、「軍司令部宣伝班」という正規の部隊に編入されたのであった。また海軍の方は、「嘱託」で、とにかく当人の同意を求めたらしいが、陸軍の方は、強制雇傭にほかならない徴用で、例の「枢要欠くべからざる職務」による免除は例を知らず、健康上の理由で免除されることがあるばかりであった。第一次徴用の時の島木健作や太宰治がその例であった。とにかく、「文芸年鑑」に従って氏名を写しておこう。

（馬来方面、註・馬来（マライ）は、シンガポール島、マライ半島、スマトラを含む当時の地名）　会田毅、小出英男、神保光太郎、中村地平、寺崎浩、井伏鱒二、中島健蔵、小栗虫太郎、秋永芳郎、大林清、北

川象一（冬彦）、里村欣三（註・彼は後にボルネオに移った。）、海音寺潮五郎の諸氏。

（ビルマ方面）　倉島竹二郎、山本和夫、岩崎栄、清水幾太郎、北林透馬、榊山潤、豊田三郎、高見順、小田嶽夫の諸氏。

（ジャワ・ボルネオ方面）　大宅壮一、阿部知二、浅野晃、北原武夫、大江賢次、富沢有為男、武田麟太郎、大木惇夫、寒川光太郎、堺誠一郎（註・彼ははじめ馬来、後にボルネオに移った。）の諸氏。

（比島方面）　沢村勉、石坂洋次郎、尾崎士郎、今日出海、火野葦平、上田広、三木清、柴田賢次郎、寺下辰夫の諸氏。

（海軍関係）　石川達三、海野十三、井上康文、丹羽文雄、間宮茂輔、村上元三、湊邦三、山岡荘八、角田喜久雄、浜本浩、桜田常久、北村小松の諸氏。

終りに（同不順）とあるのは、順不同の誤植であるが、以上の中には、すでにわたくしのこの回想に登場した人々が多く、一方、わたくしの知らない人々も多い。とにかく、一体、誰がこの人選に当ったのか、これはよくわからない。雑誌の編集者だろうという説もあり、製紙会社の役員の息子で、参謀本部の嘱託になっていた某という説もあった。徴用された文学者は、ほかにもいた。マライ組では、詩人の田中克己がなぜか抜けている。彼は、みずから「応徴詩人」（王朝詩人をもじったつもりであろう。）と称し、最後に気がついたが、参謀本部に何かつながりがあったかもしれない。帰還する時、かなりの量の押収書籍を、参謀本部宛に送らせたことを知っているからである。

徴用されたのは、文学者ばかりではなかった。カメラマン、芸術とは無関係なジャーナリスト、南

方生活の経験のある会社員、それに、歯科医もいた。

ナチスの軍隊に宣伝中隊という部隊があった。それをまねた部分もあったに相違ないが、それだけではなく、軍政部に配属される要員も含まれていた。軍のこの徴用については、わからないことだらけだが、わたくしには、調べる手がかりがない。

わたくしが、自宅で「徴用令書」を受けとったのは、一九四二年（昭和十七年）一月十四日、水曜日であったと思う。その日、わたくしは、玄関のつき当りの階段下の狭い物置きの中の雑品をひとりで整理していた。ベルが鳴ったので、内玄関のドアをあけると、見知らぬ男が立っていて、「区役所から来ました、これを……」と紙片を渡した。「徴用令書」である。これは、白い用紙だったので、召集令状の「アカガミ」に対して、「シロガミ」と呼ばれていた。ぎくりとしたが、とにかく受けとるほかなかった。「南方軍要員」として、陸軍省の徴用があったから、一月十六日に、東京市役所に出頭せよ、という令書であった。（東京都制が施行されたのは、一九四三年〈昭和十八年〉七月一日である。）とうとう来たな、と、背筋が寒くなったが、その紙片が与えた京子や母に対する衝撃は、わたくし以上だった。その時数え年でわたくしは四十歳、京子は三十一歳、母敏子は七十歳であった。とり乱した様子は見せなかったが、かえってそれだけに、わたくしは母や京子の表情を見るに忍びなかった。

徴用される危険は、一九四〇年から四一年にかけての日本軍の「仏領インドシナ」進駐のあたりからはじまった。英語やドイツ語にくらべて、日本では、フランス語のできる人間の数が少なかった。幕末には、フランス士官による幕府陸軍三兵伝習などがおこなわれていたが、一八七〇年（明治三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com